

「自然観察のネタ」シリーズ

どうしたら植物の名前が覚えられるの？

～植物の和名について～

丹羽真一

自然観察会などでよく「名前を覚えなけきゃいけいなというのは間違っている！」「知識より自然とふれあう楽しさを」みたいなことが言われています。確かに知識偏重はどんな分野でも困ったものですが、自然を楽しむ上で名前くらい知りたいなあと思うのは人情。名前も知らない生き物とはふれあうことも発見することもできないでしょう。今回は、調査館の植物マスター丹羽による「名前の覚え方」について。

■ はじめに

植物の名前を覚えたいけどなかなか覚えられない、どうすればいいのかという声をよく聞きます。そのたび、なんとか役に立つことを言いたい衝動に駆られますが、残念ながらその場の会話で相手が納得されたことは一度もありません。私は学生時代から野外でずっと植物調査をしてきたので、ふつうの人より多くの植物を見分けられるようになりました。しかし、その過程ではやはり、区別するのに大変苦労した種類も数多くありますし、今もって区別の難しい植物や見たこともない植物も数多くあります。したがって、文頭の質問は私自身のものであります。今回は、植物の名前を覚えるのに苦労しているみなさんに少しでもヒントになればという企画ですが、シダの見分け方のコツといった個別のノウハウではなく、ささやかながら私の考えや体験をまとめてみました。なお、私は自分の趣味からつい植物ばかり話題にしがちですが、「昆虫」や「鳥」に置き換えて読んでいただけたところも多いと思います。

■ なぜ難しいのか

私もあまり真剣に考えたことがあるわけではないですが、なぜ名前を覚えるのが難しいのかということについてちょっと考えてみたいと思います。植物の名前を覚えるのが難しい理由として、(1) 種類が多い、(2) 似た種類の組み合わせが多い、といった生物側の問題に加えて、(3) ネーミングの問題もあるように思えます。(1)の種類数は、北海道だけでも2000種ともそれ以上とも言われ、確かにぱっと覚えられるほど簡単な数ではありません。(2)の似た種類が多いという点は、もっとも悩まされるところで

表 1. 植物名を覚えることの難しさの要因

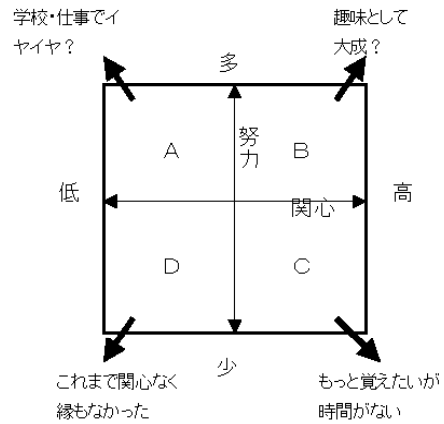
<外的要因>	
●生物側の要因	
(1)	種類数が多い
(2)	よく似た種類の組み合わせが多い
●人為的な要因	
(3)	ネーミングの問題
(4)	分類学的な混乱
<内的要因>	
(5)	記憶力、動機づけ、根気、センス、経験

す。しかし逆にいえば、似たもの同士をきちんと整理して覚えさえすれば、怖いものなしということになります。分類学の「深遠さ」を垣間見ることもできますが、あまり深入りしすぎないことで悩みも減るはず。 (3) のネーミングの問題には、(3-a) 紛らわしい名前がある、(3-b) 不適切な名前があるという二つがあります。(3-a) の紛らわしい名前の例では、「タカネクロスゲ」と「ミヤマクロスゲ」、「タカネシオガマ」と「ミヤマシオガマ」のような組み合わせがあります。(3-b) の不適切な名前の例では、「イワガラミ」と「イワノガリヤス」などあまり岩と関係ない種の名前にイワがついていたり、「～ショウマ」とか「～トラノオ」のようにさまざまなグループにまたがって使われる名前があります。ネーミングの問題についてはいつか詳しく述べたいと思っています（本章の最後に付録としていくつか紹介）。

もちろん、各人の記憶力や動機づけ、根気、センスといった問題も当然ありますが、それらについてはここでは触れません。

■ 覚えたレベル

「なかなか覚えられなくて」という言葉は誰しも口にしますが、実際にはいろんなレベルの人がいます。おおまかにいって、見分けのつく植物の種類数が、(1) 20種未満、(2) 20～50種、(3) 50～100種、(4) 100～200種、(5) 200種以上（注。この区切りは北海道での数字）くらいに分けられるのではないのでしょうか。以下はかなり強引な決め付けで、お叱りを受けるかもしれませんが、ご勘弁ください。(1) の人は、これまでは植物なんか興味なかったという人だと思います。(2) は、植物に興味はあっ



自分はどのタイプ？

表 2. 植物名を覚えることへの関心と実践のレベル

	実践レベル	区別できる種類数
(1)	これまでは興味がなかった	20 種未満
(2)	興味はあったが積極的に覚えようとしてこなかった	20 ～ 50 種
(3)	興味がありちょっとずつ覚えようとしてきた	50 ～ 100 種
(4)	興味があり積極的にコツコツ覚えてきた	100 ～ 200 種
(5)	相当に凝り性か必要に迫られた	200 種～

たがこれまでは積極的に名前を覚えようとしたことがなかった人です。(3) の人は植物に興味があって、ちょっとずつ覚える努力をしてきたか、あるとき覚えようと努力したことがある人だと思います。(4) の人は植物に興味があって、時間を見つけて覚える努力をしてきた人だと思います。(5) は、相当に凝り性な人が、必要に迫られてたくさん覚えた経験のある人だと思います。

もっとも、今自分が何種見分けられるのか実際に答えることは難しいことなので、あくまでイメージとしてとらえてください。ただ、今の自分がどの辺にあるのか、次の目標はどの辺かということの参考にはなるとと思います。

いま 40 種しか区別できない人が、一足飛びに 200 種を区別できるようにするのは簡単なことではありません。また、区別できる種類が多いほど植物観察が楽しくなるのも事実ですが、何種以上分かってないとダメということもないし、逆に 500 種も分かっているからよいということでもありません。苦労しながら覚えていく過程を楽しむという姿勢がよいと思います。

■ 覚えるコツ？

植物の分類は花や果実の特徴に基づいていることが多いので、花や果実をじっくり観察するとか、毛のあるなしに注意するとか、確かにポイントになるところはいくつかあります。しかし、植物の分類や同定作業に単純明解な統一理論があるわけではないので、残念ながらすばらしいコツというものないように思います。この点は逆に、難しい概念を覚える必要がないので誰にでもできる、と考えるべきかもしれません。

よく言われるように、一番いいのは、植物に詳しい人と一緒に野外を歩いてその場で教えてもらうことです。どんな勉強でも言えることですが、分からないときにその場で教えてもらうほど効率的で楽しいことはありません。植物に詳しい人というのは、植物の種類を数多く知っていて、似ている種類を的確に区別することができます。それだけでなく、図鑑やさまざまな文献類の知識もあり、図鑑を使いこなして「分からない」ことを「分かるようにする」技術があります。また、微妙な生育環境のちがいや質感といった経験的な知識も豊富です。いわば、知識・技術・経験を兼ね備えています。私はいまでも、佐藤謙さん（北海学園大）や五十嵐博さん（北海道野生植

物研究所）といっしょに野外を歩くと、たくさん発見があり参考になります。ところで、図鑑と辞書はちょっと似ていますが、辞書があいうえお順やアルファベット順に語句を並べているのに対し、図鑑ではそうなっていません（系統順）。当たり前ですが、そうすることができないのです（辞書は、分からないモノの「なまえ」は分かっているその内容が分からないときに使う。これに対し、図鑑を使う際には名前そのものが分からない）。この点が図鑑を使うのに知識や技術がいるところで、面倒なところですよ。

いつも身近に植物に詳しい人がいるというのはあまりないことなので、やはりふつうは自分で努力することが必要になります。もっとも、観察会などで詳しい人に尋ねられる機会もあるので、自分がわからないことをきちんと整理しておくとか具体的な話を聞きやすくなると思います。

■ 覚えはじめの頃～私の場合

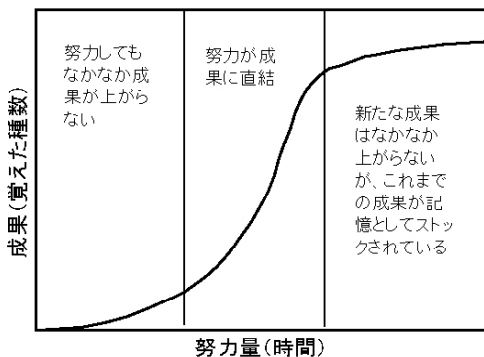
私が植物を本格的に覚えようとしたのは、大学の 2 年生のころでした。始めのうち、私が使っていた図鑑は、「新版・北海道の花」（鮫島ほか 1985 年、北大図書刊行会）のみでした。これでひたすら絵合わせをしていました。絵合わせとは、実物と似ている種を図鑑の写真やスケッチ画から探してくるという同定の方法です。そのころは標本は取らない主義で、その場に座りこんでスケッチをしたり、メモをしたりしながら調べた記憶があります。絵合わせはまちがいをしやすいので、やるべきではないといわれています。私もそう思いますが、一面では絵合わせにも効用があるとも思っています。非常に特徴的な種では絵合わせでも十分同定できるし、絵合わせも真剣にやるにはか

	図鑑を使いこなすための六箇条
一、	自分のお気に入りハンディ図鑑を一冊持つべし
二、	野外に出るときはいつでもポケットに入れて持ち歩くべし
三、	開くの面倒がらぬこと
四、	植物を見た日付け、場所などメモを書きこむとよい
五、	ほんやりしたときなどにぱらぱらページをめくる習慣をつけるとよい
六、	図鑑は消耗品と考えるべし

なりまじめに観察をしなければならなくなるからです。また、自分の図鑑になじむこともできました。

■ 努力量と覚えられる種類数の関係

努力すればするほど種類を覚えられることは言うまでもありませんが、おもしろい小説でも始めの何ページかは読み進むのが苦痛なことがあるように、植物を覚えるのも始めのうちは苦痛が多いものです。努力量と成果には「S字の法則」のような関係があります。すなわち、はじめのうちは努力してもなかなか覚えられる種類数は増加していきません。ところが、ある程度区別できる種が増えてくると、一気に新しい種を覚えられるようになります。これは、自分が知っている植物があると、それを基準にして近縁のよく似た植物を識別することができるので、知っている種が多いほど新しい種を覚えやすくなるからです。こういう



時期は覚えるのが楽しくて仕方ない状態といえます。ただし、あるところまで覚えると、珍しい種や同定の難しい種が残ってくるので、再び努力してもなかなか覚えられない状態になります。

20種しか分からないときに新たに1種覚えるのは簡単ではありませんが、そういうときに覚える1種の方が、100種分かっているときの1種より価値があるともいえます。なかなか覚えられないからといってこの段階で努力をあきらめてしまうと、努力した割りにちょっとしか覚えられなかったということになってしまいます。

■ 植物を覚える努力 ～私の場合～

調査で同定を間違えることは本来あってはならないことですが、これを完全に防ぎきることは実際には不可能です。また、調査中に同定を迷うこともあります。私は、間違えたり、判断に迷ったりという経験をできるだけ、記憶にストックするように努めています。自分の間違えるパターンや苦手な種類を自覚し、次にミスをしないようにするためです。こうすることで、新たに種類を覚えていくこともできます。明らかな勘違いの場合も、ミスしやすいパターンが隠れていることがあるので、心にとめておくようにしています。

私がつい言い間違えたり書き間違えたり

しやすいものに、ムシトリナデシコとハナイカリがあります。これをどういうわけかたまたま、ムシトリスミシ、イカリソウと書いてしまいます。こういうミスは後から見てもすぐ間違いと気づきますが、もしハイイヌツゲとハイイヌガヤを間違えるとまちがいと気づかないまま印刷してしまうこともあるかもしれません。

■ 植物は動物に比べて覚えにくい？ それとも覚えやすい？

どんなグループにも覚えやすさ、覚えにくさはそれぞれありますが、私は、植物は名前を覚えやすいグループだと思っています。植物は鳥などと違って動くことがないので、じっくり観察することができるからです。野鳥の同定は、植物よりも経験的な知識がたくさん求められるようにも思います。また、一般に（高等）植物はある程度の大きさがあり、顕微鏡やルーペを使わないでも同定できる種が多い点も覚えやすい理由の一つです。より小型の昆虫類ではそうもいかないと思います。

■ 植物をよく知っているとは？

植物の名前にとりわけ詳しい人と一緒に野外を歩いていると、「植物の名前をよく知っているとは、たくさんの植物の中から一つ一つの植物を見つけ出せることだ」ということがよく分かります。本当に目立たない小さな植物でもすぐに見つけてしまうからです。ちょうど、オーケストラの演奏の中から、使われている楽器の一つ一つを瞬時に言い当てるような感じです。図鑑的な知識の量にさほどの違いがなくても、こ

の能力の違いのせいで、一緒に歩いても見つける種類の数に大きな違いが出てしまいます。その筋の人どうしでは、よく「目が良い」といういい方をします。私も目がいいねといわれたことがありましたが、そのときは視力のことを言われているのかなと思いました。こうした「目のよしあし」はセンスに基づくものですが、生まれつきのものというよりは経験と知識によって研かれた職人技のようなもののように思われます。

■ 最後に

今回は植物の名前覚えにまつわることをテーマにしてみました。名前を知ることはその種を知る始まりに過ぎません。自然は重層的なので、たくさん名前を知っているから自然に詳しいとも限りません。したがって、生き物への興味がわいたときに、必ずしも種名を網羅的に覚えることから始める必要もないのです。一方で、名前を知っているとさまざまな情報を頭の中で整理しやすくなります。私の中では、遠い旅先で思いがけず見知っている植物に出会うことも、知らない植物を見るのと同じくらい楽しみになっています。

■ 付録

植物の名前を覚えるのに、名前の由来にこだわる人は多いようです（年配の人に特に多い）。私はあまり関心がないせいか、由来については無知です。ヒトリシズカやムラサキシキブのように分かりやすいものもありますが、今一つよく分からないものが多いと感じています。かといって全く記号

として覚えることはできないので、漢字名をみてイメージを連想したりします。

植物の名前（ネーミング）にはいくつかのパターンがあり、そういうクセを知っているとやたら長い名前に会ったときなどでもひるまずにすみます。以下に、植物名によく用いられる接頭語と接尾語を紹介します。こうしてみると、覚える方も大変ですが、名づける方もいろいろ苦労があったのではないかと想像されます。

①接頭語：形態的な特徴を表わすものや、生育する地域を表わすものが多い。形態を表すものとして、(全体の)大きさを表わす【ヒメ～・メ～・コ～・オオ～・オニ～・ウシ～・セイタカ～など】や、色を表す【シロ～・アカ～・アオ～・ショウジョウ～・キン～など】、姿をあらわす【ツル～・ハイ～・タチ～など】(注意：ツルニガクサは地下茎)、葉の形を表わす【ヒロハ～・ホソバ～・オオバ～・コバノ～・ヘラバ～・ナガハ～】、毛の有無を示す【ケ～・ケナシ～】などがある。

また、分布域を表わすものとして、北方系であることを示す【エゾ～・キタ～・カンチ～など】、生育環境を示す【ハマ～・ヤマ～・オカ～・ノ～・ヤブ～・ミヤマ～・タカネ～・イワ～・オク～・タニ～・ミゾ～・ヤチ～・ニワ～・アレチ～など】がある。ヤマは栽培種に対して用いられる場合(ノ～やヤブ～に近い：ヤマクワ・ヤマアワなど)と、ミヤマと同義に用いられる場合がある(その場合はオヤマ～になる)。ミヤマ(深山)がつく種には高山性のものが多いが、ミヤマハコベ・ミヤマエンレイソウ・ミヤマジュズスゲ・ミヤマトバナなどは北海道では比較的低い場所に多く、高山には現われない。ハタザオ属やヌカボ属では、低地性のハタザオ(ヌカボ)、低山～山地性のヤマハタザオ(ヤマヌカボ)、高山性のミヤマハタザオ(ミヤマヌカボ)のように、接頭語によって分布の異なる近縁種を区別す

る。すばり、生育する地名を示す【コウバリ～・アポイ～・ヒダカ～・タイセツ～など】もあり、固有種にこれらの接頭語を冠することも多い。ただし、ノウゴウイチゴ・ミソガワソウ・コンロンソウなどは地域名が当てられているが、広く分布する種である。帰化種に対しては、その原産地を示す【アメリカ～、フランス～、オランダ～、ヨーロッパ～など】があるが、ナンバンハコベ・チョウセンゴモシは自生種であるので注意が必要である。

そのほか、人名を示す【フォーリー～・チョウノスケ～など】、有毒性を示す【ドク～】、刺を持つことを示す【トゲ～】、類似種を表わす【ウマノ～・ヘビ～・イヌ～・キツネ～・ニセ～】、草本であることを強調する【クサ～】などがある。また、接頭語は単独で用いられる場合だけでなく、いくつか連ねられる場合もある。例えば、コミヤマカタバミ(小さいことを示すコト山に生育することを示すミヤマ)、ナガボノシロワシモコウ(花序の形態を示すナガボノとシロ)がある。

②接尾語：特定のグループであることを示すもの【～スミシ・～チドリ・～ラン・～マツ・～ヤナギ・～ギク・～イ・～ガヤ・～スゲなど】には、生物分類と対応しているものも多いが、ヤナギラン(アカバナ科)やサンカクイ(カヤツリグサ科)など例外もある。木本であることを示す【～ボク・～ノキ】、草本であることを示す【～クサ(グサ)・～ソウ】、シダ植物であることを示す【～シダ】もある。ただし、フッキソウ(半低木)・チョウノスケソウ(小低木)や、ヒメスギラン・ウチワゴケ(シダ)など、こちらも例外がある。このほか、茎が中空の低木を示す【～ウツギ】、もともと食べられる草を示す【～ナ・～アマナ】、花が目立つ【～バナ】、類似種を示す【～モドキ】などがある。

なお、【トラノオ】はさまざまな植物名に使われており、接尾語にも接頭語にもよく用いられる。